

〈報 告〉

同朋大学社会福祉学部 平成 28 年度大学教育改革推進事業

中部圏教育改革ネットワーク

(旧産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事業)

～平成 28 年度の実践報告～

目 黒 達 哉

はじめに

平成 24 年 9 月 20 日に、本学社会福祉学部は、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充实体制整備事業」に『前に踏み出し、考え抜き、チームで社会と結びつく教育力の成長』というテーマで、三重大学を幹事校として中部圏の 25 大学で応募したところ選定された。選定されましたことは、長年培って来た本学社会福祉学部の社会福祉教育が高く評価されたと思われる。なお、平成 26 年度でもってこの事業は無事に終了しました。しかし、この取り組みの重要性と大学の首脳部のご尽力により、平成 27 年度からは、引き続き大学の自己資金で運営されることになった。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力 (12 の能力要素) から構成されています。「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で様々な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」として、経済産業省が 2006 (平成 18) 年から提唱している。この社会人基礎力を、本学社会福祉学部では「福祉実践基礎力」と表現している。福祉実践基礎力とは、「心が動く力」、「じっくり考える力」、「共に

生きる力」の3つの能力（13の能力）から構成されている。「福祉実践基礎力」は、本学の建学の精神である『同朋和敬』の精神を社会福祉現場に具現化する要素として重要であると考えている。

I. 事業の概要と目的

現在まで、本学部では、まず初年次ゼミにおいてゼミ単位でのディベートやプレゼンテーションおよびフィールドワークを行って、能動的で自律的・自立的な学習態度の育成に努めている。そして、2～4年では、演習やゼミにおいて、さらに能動的な学習ができるよう促してきた。また、学外研修での施設見学やボランティア論、ボランティア活動などでの実体験をして、地域や福祉業界との連携を深めている。そして、円滑な学習を進めるためにアドバイザー制度で補完している。そこで、本事業では、今までの個々の教育改善を入学前プログラムと初年次教育の連結のための教材を作成・利用する有機的結合、講義科目での学生参加型授業の拡大、演習科目での共同学習の拡大と問題解決能力の育成、および講義・演習・実習科目との有機的結合を行うことにより、教育改革を全教員がチャレンジしてチームで働いて実施をしている。

このような取組により、従来の学士課程教育を活性化させ、学生の学習意欲の高揚をもたらすことができる。本取組の目的は、産業界（社会福祉現場）のニーズに対応した高度な専門性と実践力を身につけた福祉人材を育成することである。

具体的には次のようになる。

1. アクティブラーニングを活用した教育力の強化

社会人基礎力のため、初期段階としては、「社会福祉入門」のテキスト作成し、初年次教育の基礎ゼミ等で活用する。

2. 地域・産業界との連携力の強化

(1) 地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入

- ① 福祉業界のニーズを把握のための意見交換会（精神保健福祉、介護福祉など）
- ② 社会福祉現場のOB・OGとの連携による現状理解とニーズ把握
「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉学部卒社会福祉関係従事者のつどい」「若手OB・OG研究会」
- ③ 保育現場のニーズに対応した保育者養成「実践力を高めるキッズカレッジ」
- ④ 特別講義「産業界のニーズに対応した社会福祉教育」（年4回シリーズ）
- ⑤ 産業界との協働による「精神障害者サポートプロジェクト」
- ⑥ 地域ニーズに応えるための「誰でも参加できるSST」
- ⑦ 地域ニーズに応えるための「気軽に立ち寄れるボランティアサロン」

(2) 産学連携授業の実施

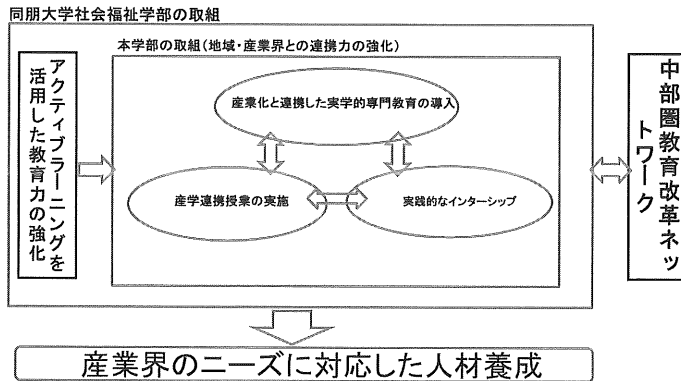
社会福祉現場で活躍している福祉実務家等と連携した実学的な科目を運営する。

- ① キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ
 - ② ボランティア論
 - ③ ボランティア活動
 - ④ 国際ボランティア論
 - ⑤ NPO・ボランティアマネジメント総論
 - ⑥ NPO・ボランティアフィールドワーク
 - ⑦ 傾聴活動論
 - ⑧ その他（実務家を招聘する科目）
- ### (3) 地域の産業界と連携した実践的なインターンシップの実施

地域の社会福祉施設、NPO 法人、NGO 団体、ボランティア団体等と協働・連携し、より実践的な内容のインターシップに質的な変更を行う。

① インターンシップ I・II・III・IV

以上のような(1)～(3)の取り組みを有機的・体系的に組み合わせながら、産業界のニーズに対応した人材の育成を図る。



なお、平成 27 年度以降、大学で経費を予算化し継続している。

II. 各事業の報告

〈地域・産業界との連携力の強化〉「1.」～「14.」

1. 「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉関係従事者の集い」

○目 的

テーマである『福祉専門職に求められる力』を具体的に考え・高め・交流する機会とした。

○内 容

今回の学会では、『福祉専門職に求められる力』というテーマで福祉の仕事の意味や働くことの価値を見出し、福祉専門職としての役割や機能について学んだ。さらに今、福祉の現場で専門職として誇りを持って働いて

いる従事者の方々から発信していただき、福祉を学ぶ学生と参加者が「生きがいをもって勤め続ける魅力」につながる内容を学び、理解した。その次に、4つの分野で働く卒業生から、事例を提示して頂き、今回のテーマを私たちが実践するために何が必要なのかを学んだ。

日時 12月3日(土)

会場 成徳館 502 教室

内容 ①基調講演「福祉専門職に求められる力」

～成長し続けられる専門職であるために～

講師：下山 久之 教授

②学生研究発表

平澤ゼミ「社会的少数派である LGBT に対する学生の意識調査を行うとともに LGBT への理解を深める」

中神ゼミ「音楽に込められたメッセージを考える～様々な国の比較を通して」

平野ゼミ「子どもの貧困を考察する」

シンポジウム「福祉専門職に求められる力」

(コーディネーター：石牧 良浩 准教授)

①児童福祉分野	斎藤 由衣 (H22 卒)	児童養護施設那爛陀学苑
②教育、障がい者分野	矢野 良太 (H23 卒)	愛知県立名古屋特別支援学校
③精神福祉分野	青山 知香 (H20 卒)	医療法人医誠会 東春病院
④高齢者福祉分野	安藤小百合 (H23 卒)	フラワー園

○成果

- ・学生たちは、下山先生の基調講演「福祉専門職に求められる力～成長し続けられる専門職であるために～」でのお話の中で福祉専門職に求められることを理解することができた。
- ・学生たちは、研究発表を通じ、学生同士協力し合うことにより一つのことをやり遂げた。

- ・学生たちは、シンポジストだった卒業生のお話から、福祉・教育専門職に求められることを理解することができた。

これらの学びから学生は福祉実践基礎力を高めることができた。

2. 「実践力を高めるキッズカレッジ～学内実施型子育て支援活動～」

○目 的

- ・キッズカレッジを通して、豊かな感性やコミュニケーション能力を身につけ、保育実践力の向上を図る。
- ・0～2歳児の子どもとの関わり体験を通して、保育体験や乳児保育の環境構成方法を学ぶ。
- ・キッズカレッジ開催のための準備活動を通して仲間とのコミュニケーション力を高める。

〈各年次の目標〉

- (1) 1年次は、授業を通して学んだ乳幼児の発達理論を、キッズカレッジ実践の中で確認する。触れ合いの中で、乳幼児と遊ぶことの楽しさを学び、環境をつくる体験をする。また、地域の支援者がどのように親子と関わっているかを観察したり、子どもと一緒に遊ぶ方法や年齢にあった寄り添い方を具体的に学んだりする。
- (2) 2年次は、教員や子育て支援者から遊びや関わり方の指導を受け、子どもや保護者の内面理解を深め支援の仕方を学ぶ。また、乳幼児の発達に合った出し物を工夫したり、実践内容の展開を企画したりすることを体験的に学ぶ。
- (3) 3年次は、発達に応じた遊びや援助の方法を工夫し、保育の「ねらい」「内容」、環境構成の仕方を学ぶ。さらに、実践を通して、乳幼児や保護者の状況把握体験を積み重ね、その時々での援助の在り方を学ぶ。また、学生が担当する企画を通して、保育内容の展開の仕方を学ぶ。
- (4) 4年次は、自分の課題や研究テーマを見つけて総合的に実践研究を

行い、親子支援の実践力を身につける。1～3年次生への取り組みへの助言をしたり、保育展開の工夫を助言したりしながら、自己の実践力を高める。

○内 容

〈対象〉

名古屋市中村区を中心とした近隣在住の親子。

コース毎の子どもの年齢

平日：6か月～就園前までの乳幼児（ただし身体遊びのコースは2歳以上）

休日：1歳～就園前までの乳幼児

〈具体的な活動内容〉

時 間	活 動
9時50分	受付
10時00分	室内で好きな遊び ・保護者は教員の特別講座へ参加
10時40分	・子どもは学生と好きな遊びのつづきを楽しむ
10時55分	おもちゃの片付け
11時00分	みんなで遊びましょう（保育学生の保育実技を楽しむ）
11時30分	さようなら

○実 績

〈2016年度前期・後期〉

期 間	実施回数	参加者延べ人数
2016年度 前期	20回	601名
2016年度 後期	16回	458名
総 計	36回	1,059名

○成 果

◇各学年における学生自身の振り返りから、次のような学びが得られたといえる。

1年次：未経験という事もあり、不安以上の期待を抱きながら当日を迎

- え、乳幼児の可愛らしさや、たくさんの親子の前で手遊びやダンスなどの活動をする恥ずかしさのなかの喜びを感じているようだった。後期に入ると学生が主体的に準備に取り組み、一年生なりの工夫をしながら保育実技に季節や子どもに合った活動を入れようとしていた。
- 2年次：進級と共に新たな仲間との関係づくりから始まり、実践当日に向けて環境構成や保育実技内容を学生が主体的に検討し、取り組んでいった。
- 3年次：各専門ゼミの学びに合わせたねらいが立てられ、学生たちは言葉や身体の発達、環境、子育て支援などそれぞれの視点を持って取り組んでいった。たとえば、6か月の女兒の成長の姿に毎回目を向け、読み取っていく学生や、1歳児の男児の遊びの特徴を注目する学生といった個々の学生の考えが活動の中に表れるようになってきたといえる。
- 4年次：これまでの経験をいかしながら後輩の活動の様子を見守り、また、実践活動を客観的にも捉えながら、活動に必要なことを学生が考えていった。子育て支援活動の会場内だけでなく、会場外の環境構成に気を配ったり、天候に合せた安全な環境をつくったりと工夫していた。

この経験を通して、乳幼児と関わるすばらしさ、親子を支える職業への関心を高め、子ども学を学ぶ意欲の向上に繋げていきたいと思う。なお、参加保護者を対象に実施している活動後のアンケート調査では、学生の笑顔やがんばりを評価する声が多かった。こうした保護者の声を学生へと確実にフィードバックさせ、今後の活動へ還元していきたい。

3. 「キッズカレッジ実技講習会」

○目 的

キッズカレッジ実技講習会は、同朋大学社会福祉学部社会福祉学科子ど

も学専攻の学生が主体となって企画運営している「キッズカレッジ」の実践に向けて、実践力の向上を目的に学ぶ機会を確保するため実施している。

○内 容

(1) むすび座観劇

9月16日に人形劇団むすび座の公演を観劇した。この劇は同朋幼稚園の園児も観劇をした。学生は、人形劇の技術を見るだけでなく、子どもたちの反応を見ることもでき、子どもたちと演者との間を体感することができた。また、劇終了後に直接質問する時間を設けていただき、学生は実際の人形を触りながら質問をすることができた。

(2) ドリームマップ

10月5日に原絹代氏をお招きし、「ドリームマップ」の作成を行うワークショップを行った。受講した学生は、ドリームマップの制作を通して、今の自分の状況を客観的に見ることと、未来の自分を思い描く中で、いま取り組むべき課題を見つけていた。

○実 績

それぞれの参加人数は、「むすび座観劇」が19名。「ドリームマップ」が29名。2回の合計で述べ48名の参加であった。

○成 果

むすび座の公演に関しては、子どもの反応や仕事への思いなどを学ぶこともできた。仕事をしていくうえで大切にしているおもしろいなど、プロとして働いている人から聞くお話に、大切な何かを気づいてくれたのではないかと思っている。

ドリームマップについても、今の自分をどのように考え、未来に何を思い描くのか。不安もあり、悩むいまの時期だからこそ、立ち止まって考える大切さに気付いた学生もいたようである。こころの持ちようを学生たちに教えてもらった講習会であった。

4. 「福祉業界のニーズを把握のための意見交換会」

介護福祉士養成のための実習懇談会

○目 的

福祉業界の職員を招き意見を交換する。

○内 容

平成 28 年度に介護福祉士養成のために協力いただいたヒューマンケアコースの実習施設 約 80 ケ所に参加を呼びかける。介護現場の質の向上のために施設側、大学側双方の意見交換会を実施する。

○実 績

平成 29 年 2 月 21 日 (火) 15 時 30 分～17 時

実習施設の現場指導者および管理職、大学の教員および実習指導担当者が参加した。大学の挨拶に続き、実習指導の大学側教員の自己紹介。日頃の実習指導に対する謝辞を述べる。続いて施設側の大学への要望・学生に関する感想・学校側に対する質問をうける。質問に対する学校側の回答をし、学生をどのように育てるか、介護現場を向上するために必要なことについて意見がだされた。

○成 果

実習等で日頃からお世話になっている現場の職員との意見交換の場として双方に意味のあるものであった。

5. ①「介護福祉業界のニーズに対応した社会福祉教育 1」

○目 的

入学間もない学生を対象とし、施設の使命や、職員の大切にしていることを学ぶ。

○内 容

同朋大学介護福祉コース 1 年生の、10 月 13 日に実施する学外研修の施設長による設紹介と、施設先のハード・ソフト両面の「大切にしているこ

と」の講義である。

○実績

平成28年10月18日10時40分～12時10分 H103教室

あんしん生活葬施設長 中島加織様他職員2名

参加学生 20名

5. ②「介護福祉業界のニーズに対応した社会福祉教育2」

○目的

入学間もない学生を対象とし、学外研修修了後の振り返り等、研修後の学びとする。

○内容

同朋大学介護福祉コース1年生が実施した学外研修後の振り返りと、研修において見学することはできたが説明をうけることができなかった項目を専門職より講義をうける。

○実績

平成28年10月11日10時40分～12時10分 H103教室

あんしん生活葬施設長 中島加織様他職員2名

参加学生 20名

○成果

アンケートの結果ほぼ全員が、「大変よかった」「よかった」と回答しており。「よくなかった」は一人もいなかった。学外研修による福祉現場の真剣さを学ぶことででき、今後の学びに大きく寄与していたものと考えられる。

6. 「精神障害者サポートプロジェクト」

○目的

精神障害をもつ当事者、またその家族の方々は日々の生活でどのような

苦勞を抱えているのか、あるいは希望に向かって進んでいるのかを、直接ご本人たちに伺うことによって理解することを目的とした。

○内 容

- ① 特定非営利活動法人よすがの出前講座「体験をわかちあう会」を活用し、精神障害をもつ当事者と精神保健福祉士にお越しいただき、体験談を伺った。
- ② 学生が「交流会」を企画、準備し、当事者を招いて交流会を行った。

○実 績

- ① 日時：2016年7月14日(木) 10時40分～12時10分
会場：成徳館 706 教室
講師：特定非営利活動法人よすが
就労継続支援 B 型 + 日中一時支援 いーばしょ
野田盛二氏（精神保健福祉士）、当事者 2 名
- ② 日時：2017年1月12日(木) 10時40分～12時10分
会場：成徳館 706 教室
参加者：障害福祉サービス施設利用者と支援者 12 名、学生 10 名、
教員 1 名

○成 果

- ① 当事者の「体験」を聞くだけでなく、質疑応答を通して「自分たちにできること」は何かを考える機会となった。当事者からの「普通に接して欲しい」「できることを『するな』と言われるのはつらい」などの言葉が心に残ったようである。
- ② 上記①の体験を踏まえ、次は学生が自分たちで当事者交流の場を設けることとなった。当日までの準備、また当日の進行には手間取っていたが、参加者からの「またやって欲しい」という要望を受け、内容・手順を改善し、新年度早々、2 回目を実施する予定である。

7. 「誰でも参加できる SST」

○目 的

SST (Social Skills Training : 社会生活技能訓練) は、主に対人関係を中心として「自分の気持ちや考えを上手に相手に伝える練習」をするプログラムである。SST では個人の問題をグループ全体で共有し励まし合い、支えながら練習をすすめる。「誰でも参加できる SST」は毎月開催しているが、このセッションでは地域活動支援センターのピアスタッフにお越しいただき、ピアの立場からの意見を伺うことを目的として開催した。

○内 容

「誰でも参加できる SST」は学生以外に精神障害をもつ当事者、家族、専門家、一般の方などが気軽に参加できる場である。講師にはその場で SST のリーダーとしてグループを進行してもらった。

日時：2016 年 12 月 21 日 (水) 13 時 15 分～14 時 30 分

会場：博聞館 102 教室

講師：三桶裕嗣氏 (地域活動支援センターもやい)

○実 績

当日の参加者は 20 名、その内訳は当事者 4 名、専門家 2 名、家族 2 名、卒業生 1 名、学生 (4 年) 10 名、教員 1 名であった。この日は学生 2 名が自分の練習課題を提案し、実際にロールプレイを用いて練習を行った。その内容は「大勢の前 (実習報告会) で緊張せずに発表する」「就職後、わからないことを先輩に質問する」であった。三桶氏にはこの練習を SST リーダーとしてスムーズに進めてもらった。

○成 果

今回、「支援する側、される側」のちょうど真ん中の立ち位置ともいえるピアスタッフの三桶氏から、どちらかの立場に偏らないものの見方、考え方を学ぶことができた。

また、この「誰でも参加できる SST」はその後も継続して開催してい

る。そして学生たちは準備から片付けまで主体的に取り組んでいるが、特にグループ開始前の時間帯にすでに集まっている参加者へ自然に声をかけることができるようになったのは大きな前進である。今後はこの取り組みを3年次生に繋げていく予定である。

8. 「キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ」

○目 的

社会福祉現場で活躍されている同朋大学社会福祉学部のOB・OGを招聘し、福祉業界のニーズに応える人材育成を目指す講義である。

また、福祉実践基礎力、福祉実践力を高める取り組むでもある。なお、福祉業界のみでなく、企業等で活躍されているOB・OGも招聘し視野を広めてもらう。

児童福祉、障害者福祉、高齢者福祉、精神保健福祉、教育、国際、心理の各分野で活躍されているOB・OGを招聘し、講義を拝聴し、またOB・OGとコミュニケーションを図る場とする。

○内 容

① キャリア支援講座Ⅰ（前期・2単位、選択科目）

主として、OB・OGが福祉職を志そうと思った動機や仕事の内容、学生時代をどのように過ごしていたかを中心に講義をしていただくこととする。

② キャリア支援講座Ⅱ（後期・2単位、選択科目）

主として、OB・OGから現場が求めている人材について講義をしていただくこととする。

○成 果

OB・OGの先生方のお話はたいへん分かり易く、学生は身近に感じる事ができた。また、学生が今後の進路を考える上でも参考になった。さらには、それぞれの現場でどのような人材が求められているのかを理解す

ることができた。

社会福祉現場のみでなく、企業で活躍されているOB・OGのお話を聞くことができ、学生の視野が広がった。

今年度は学生からの要望があった教職関係（特別支援学校）のOBをお招きすることができ、幅広くお話を伺うことができ、福祉実践基礎力の構築の一助となった。

○実績（平成28年度）

1 キャリア支援講座Ⅰ（前期）水曜日第3限

- | | | | |
|---|-------|-----------|---|
| ① | 4月6日 | オリエンテーション | （学部長・キャリア支援センター課長） |
| ② | 4月13日 | 大橋 圭太氏 | 児童指導員（担当：丹羽先生） |
| ③ | 4月20日 | 岡 久美子氏 | シニアライフ研究所りあもでん代表
（担当：平野先生） |
| ④ | 4月27日 | 後藤 勉氏 | 児童養護施設 和進館児童ホーム統括主任
（担当：中神先生） |
| ⑤ | 5月11日 | 山本 悟氏 | 岐阜県立揖斐特別支援学校高等部教諭
（担当：目黒先生） |
| ⑥ | 5月18日 | 山口 喜樹氏 | 高齢者分野（担当：村上先生） |
| ⑦ | 5月25日 | 大橋 弘政氏 | 元プロボクサー
〈東洋スーパーバンタム級チャンピオン〉
（担当：伊東先生） |
| ⑧ | 6月1日 | 追分 伸夫氏 | べにしだの家 施設長（担当：渡邊先生） |
| ⑨ | 6月8日 | 宮崎 嘉孝氏 | 北津島病院 医療相談員（担当：伊東先生） |
| ⑩ | 6月15日 | 耕田 真未氏 | セントラルクリニック医療相談員
（担当：村上先生） |
| ⑪ | 6月22日 | 成瀬 利奈氏 | 明治安田生命保険相互会社法人営業職
（担当：渡邊先生） |
| ⑫ | 6月29日 | 松田 耕治氏 | 医療法人豊隆会さくらデイサービスセンター長
（担当：目黒先生） |
| ⑬ | 7月6日 | 林 史典氏 | 社会福祉法人英楽会楓林花の里 事務主任
（担当：目黒先生） |
| ⑭ | 7月13日 | 石川 諭氏 | (有)ナチュラル・ライフ グループホーム香寿
（担当：中神先生） |
| ⑮ | 7月20日 | まとめ | （学部長・キャリア支援センター課長） |

目 黒 達 哉

2 キャリア支援講座Ⅱ（前期）水曜日第3限

- ① 9月21日 オリエンテーション （学部長・キャリア支援センター課長）
- ② 9月28日 成瀬 利奈氏 明治安田生命保険相互会社 法人営業職
（担当：渡邊先生）
- ③ 10月5日 大東 慎治氏 うえの授産所 副所長 （担当：目黒先生）
- ④ 10月12日 奥村 恵一氏 西山クリニック 精神保健福祉士
（担当：吉田先生）
- ⑤ 10月19日 山口 善樹氏 高齢者分野 （担当：村上先生）
- ⑥ 10月26日 鈴木 光氏 美濃加茂市社会福祉協議会
（担当：伊東先生）
- ⑦ 11月2日 大橋 弘政氏 元プロボクサー 東洋スーパーバンダム級チャンピオン
（担当：渡邊先生）
- ⑧ 11月9日 追分 伸夫氏 べにしだの家 施設長 （担当：渡邊先生）
- ⑨ 11月16日 吉岡 英雄氏 愛知県社会福祉士会生涯研修センター担当理事
（担当：目黒先生）
- ⑩ 11月23日 中間まとめ （学部長・キャリア支援センター課長）
- ⑪ 11月30日 宮浦 幸昭氏 児童養護施設長 （担当：目黒先生）
- ⑫ 12月7日 宇井 啓恵氏 岩西保育園 保育士 （担当：中神先生）
- ⑬ 12月14日 濱口かおり氏 津島市民病院 医療相談員（担当：村上先生）
- ⑭ 12月21日 近藤 重晴氏 医療法人三善会 デイサービスセンターサンテラス センター長 （担当：目黒先生）
- ⑮ 1月11日 まとめ （学部長・キャリア支援センター課長）

9. 「国際ボランティア論、ボランティア論、NPO マネージメント論とフィールドワーク」

○目 的

文部科学省の就業力支援事業（2014年度で終了）をきっかけにして、2015《平成27》年度に引き続き、今年も、国内外における国際分野の問題などに焦点をあてながら、学生の主体性を生かすための授業や活動を同朋大学の事業として引き続き推し進める。更に、私たちを取り巻く自然や環境への関心や働きかける力行動の育成などを含む教育課題に重点を置きつつ、実践力・行動力も身につけたい。

- ① 私たちを取り巻く社会における様々な問題、とりわけ、国内外のグローバルな問題や課題に関心を持って目を向ける。それらの問題の背景や原因を理解し、自分たちに何ができるのかを考え、自ら積極的に行動する力を養う。
- ② 名古屋市周辺在住の外国人の方々や同朋大学の留学生、国内外でボランティア等の活動をしている方を特別アドバイザーとしてお招きし、彼らが抱える具体的な生活上の悩みや問題、国内外での社会情勢、ボランティア事情や課題などに耳を傾ける。
- ③ 上記の目的①や下記の④の具体的な行動、或いは実践の場を設ける。そのプロセスにおいて、事業、(例えば、ここ数年行っている『国籍や世代を越えた地域の交流会』など)の企画力や運営能力などを培う。
- ④ 身近なところで起こっている問題に関心を持ち、実態の調査や結果の分析をする力を養う。その上で、見つけた問題の解決に向けての方法等を考え、必要なプロジェクト等の立案やそれを実行する能力を身につける。その過程で、社会で必要となる実践力やコミュニケーション能力、柔軟な思考力や対応力なども学んでいく。

○内 容

- ① 愛知県に在住する外国人の生活や彼らの実態を知り、異文化、多・他文化の理解の重要性を学ぶ方法として、『世界の子どもフォーラム～外国をルーツにもつ子どもたちの現在と未来』を企画し実践、『外国人の子どもたちの1日キャンプ』を通し、それぞれの文化の披露を通して、お互いを理解しあう機会を持たた。
- ② 海外、特に開発途上国の人々の生活実態、特に年々深刻になる環境問題の悪影響と彼らの健康や生活の質の低下、貧困などを理解し、今の私たちに何ができるのかを思考し行動能力を養う。
- ③ 名古屋市とその周辺に存在する外国人や留学生、国内外で様々な福祉的領域で活躍する方々を特別アドバイザーとしてお招きし、彼らの

経験や直面した様々な問題や実態などに耳を傾け交流する機会を持つ。更に、国際貢献分野の専門機関、団体や施設、様々な外国籍の方々が訪れる場所などを訪問し、外国人やこうした施設などで働く人たちから直接に体験談などを聞いたり、インタビューしたりしながら、実態を把握し実践に向けてのヒントなどを学びとる

○実績（注：実績と成果は、それぞれの番号に呼応している。）

- ① 事業企画と実践への参加：昨年に引き続き、2016年12月18日(日)に、名古屋市中村区の「人権尊重のまちづくり事業」の協力を得て、『なかむら クリスマスパーティ』を行った。国籍や年齢などの垣根を越えた地域の方たちとの交流を目的としたものであり、同朋大学の学生ボランティアたちとその友人30人余りが、企画段階から何でも話し合いを重ね実践した。
- ② 講義(1)：国内の国際社会福祉問題として、今年も愛知県に在住する外国人の生活や医療、教育、言葉や習慣などの違いから起こる誤解や摩擦などによる差別や偏見などの諸問題に焦点をあてた。「外国人」という言葉に着目し、国際理解と多文化共生を考えるために、3人の外国人をゲストに招きお話を伺った。
- ③ 講義(2)：グローバルな国際社会福祉問題やボランティアを考えるきっかけ作りのために、今年も開発途上国でフォトジャーナリストとして活躍する30代の女性をお招きした。
- ④ 講義(3)：災害後の支援と同時に、防災・減災に関して専門家集団として全国的に活躍しているのが、特定非営利活動（NPO）法人、「レスキューストックヤード」である。この法人を立ち上げ代表をされている方をお招きし、様々な災害現場での実例をもとに話していただいた。
- ⑤ 校外学習(1)：2017年1月13日（9時30分～14時30分）、外国人が多く訪れるという大須界隈で、彼らやその界隈で働く方たちへの街頭インタビューを試み、彼らの日本での生活や、日本の文化や習慣も

含め、日本に対する感想などを直接尋ねる機会を持った。国際開発機構（JICA）中部の訪問では、「地球広場」という学びの場で、ゲームや簡単な体験型実験、クイズなどを行いながら、国際的な環境問題、資源の問題、貧困とそれがもたらす食、病気、教育、差別などの諸問題、戦争の原因などを体感し学んだ。異国の食事も経験し、食材の味や食感、使用されている調味料や調理法の違いも体験した。

- ⑥ 校外学習(2)：ボランティア・NPO マネージメント論を2016年前期に受講した学生や新規の受講生たちによるフィールドワークを行った。前期のNPO マネージメント論では、4つのグループに分かれ、各グループを一つの「NPO」として位置づけた。そして各グループで、ブレインストーミングによる社会的問題の発見、課題の抽出、コンセプトづくり、企画のポテンシャル分析やマーケティング・ポジショニングの過程を体験し、問題解決のための企画案の策定を行った。それらをお互いに発表し、内容を共有し、評価も実施した。

この経験を土台にして、後期は、身近な環境に潜む社会的問題への認識を更に向上させるために、「フィールドワーク」という社会調査方法について、詳しく理解し磨きをかけることを主目的にした。2016年12月に、それぞれの受講生の報告会を行い、問題点や今後の課題を含めた議論と評価を実施した。

○成 果

- ① 本年度も、実に充実した企画であったと考える。会場を後にする参加者たちの笑顔や感謝の言葉の数々が、それを裏付けている。過去3年間をけん引してきた4年生から完全に引継ぎをした3年生が、すべての点においてリーダーシップを発揮し、新たに加わった多くの1年生や2年生の学生を中心に、素晴らしい実践経験になったのではないかと思う。
- ② 講義を通して学生たちにはその深刻さや実態等を様々な生きた資料

やニュースなどを使って考えたり議論したりすることが出来た。学生たちの持っていた「外国人」に対する抽象的なイメージが、「生身の人間」としての具体的なイメージへと変わったことは、特筆するべきであろう。

日本国内では、再び戦争に向かって突き進んでいるような不穏な気配すら感じる中で、“平和”とは何かについて、様々な側面から深く話し合う結果を持ったことは、これからの世の中で活躍する若い人たちにとって意義深いと思う。

- ③ 多くの危険や困難が満ち溢れる開発途上国の現場で、体を張っての取材などを続ける若い女性フォトジャーナリストの姿は、昨年同様、学生たちには刺激的であった。
- ④ 「災害時には、高齢者や障害者、幼い子どもといった特殊な立場にいる人だけではなく、すべての人が、いわゆる“災害弱者”になる。」といった、“当事者意識”を常に頭に置くことの重要性を、今年を受講生たちも学んだようだ。何人かの受講生たちは、実際に地元の青年団や地域の方たちへ呼びかけて、被災した方たちが必要としていた物資を集め、トラックで現地まで運んだそうである。その報告は、他の100人近い受講生たちにとって、(考えるばかりでなく)「行動する大切さ」を伝える生きた教材となった。
- ⑤ 名古屋市、しかも同朋大学の近くに国際関連の施設があることすら知らなかった学生たちにとっては、実際の訪問は非常に意義のあるものであったようである。
 - 大須観音、大須商店街を歩きながら、2~3人のチームをつくり、外国の方(と思しき人)たちを対象に「ユーは何しに日本に来たの?」というタイトルで、インタビューを行った。インタビューシート(添付資料参照)は、愛知県観光局観光推進課の「愛知県訪日外客動向調査 H27」を参考に、前もって担講義担当教員が作成したも

のを使用した。結局は「貴重な学び」になったことが、レポートから見えてきた。

● JICA 中部では、(時間の都合から) 青年海外協力隊員として活躍された方の説明は省略し、各自で、ユニークな国際教育を主眼とした「地球広場」のコーナーを回ることにした。味覚、臭覚、触覚など五感を総動員しての、貴重な多・他文化体験となったのは言うまでもない。

⑥ 4つのグループ(NPO)は、それぞれ①子どもの虐待問題、②大学の設備問題、③学食のバリアフリー問題、④大学周辺のゴミのポイ捨て問題をテーマとして、課題解決に向けた企画を策定して発表評価することで、社会貢献活動のマネジメントに関する主要なプロセスを体験的に学ぶことができたのではないかと思う。前期・後期を含め、フィールドワークという社会調査方法についての基本的理解も深めることもできたのではと考える。更には、このすべての過程が、大学における“自分の研究”すなわち卒業論文などに結び付く貴重な礎や学びに繋がっていくのではないだろうか。

10. 「ボランティア活動」

○目的

ボランティア活動を通して、利用者とのかかわり方を学び、また連携機関との協働のあり方を学び福祉実践基礎力を身に付けることを目的とする。

○内容 社会福祉法人若竹荘あけぼの作業所の連携機関の協力を得て、知的障害者の生活介護事業を实践する。『事前学習・準備⇒実践(活動)⇒事後学習(フォローアップ)』という一連の学びの過程を通して福祉専門職としての福祉実践基礎力を身に付ける。いずれも実学的専門教育である「ボランティア活動A」の授業の中で実施した。

○実 績

1) 知的障害者の生活介護事業（あけぼの作業所の利用者と学生の交流会）

「ボランティア活動 A」の授業時間内で事前学習・準備、事後学習（フォローアップ）を実施した。尚、活動の実績は以下の通りである。

- ① 平成 28 年 7 月 2 日 (土) 10 時～15 時、同朋大学で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。
- ② 平成 28 年 12 月 10 日 (土) 10 時～15 時、あけぼの作業所で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。

2) ボランティア活動フォローアップの実施

平成 29 年 1 月 11 日 (水) 10 時 40 分～12 時 10 分、同朋大学において、社会福祉学部の OB で福祉現場の現任者を講師としてお招きし、今年度のボランティア活動の総括とコミュニケーション能力の向上のための学習会を実施した。

○成 果

事後学習（フォローアップ）の授業における体験発表から、学生は今回のボランティア活動の授業を通じて、福祉業界で働く社会福祉従事者の仕事を目の当たりにみて、福祉の仕事の良さと大変さを体験的に学ぶことができた。

また、連携機関やそこにかかわる地域の人々と共に協働・連携して社会貢献する体験と同時に実践活動の中で自分自身の課題や人間関係に直面する体験ができたことが大きな成果であった。したがって、福祉実践基礎力は高まったと考えられる。

11. 「気軽に立ち寄れるボランティアサロン」

○目 的

ボランティア活動を通して、利用者とのかかわり方を学び、また連携機関との協働のあり方を学び福祉実践基礎力を身に付けることを目的とする。

○内 容

社会福祉法人名古屋市中村区社会福祉協議会中村ディサービスセンターの利用者（高齢者）が月1回、90分程度、来学する。職員も2名同行する。学生はボランティアとして、高齢者の大学見学をサポートした。内容は、名古屋音楽大学学生によるミニ演奏会、学内にあるカフェで高齢者と学生がコミュニケーションを図る。学生は『事前準備⇒実践（活動）⇒事後学習（フォローアップ）』という一連の学びの過程を通して福祉専門職としての福祉実践基礎力を身に付ける。学生ボランティアは実学的専門教育である「ボランティア活動」の授業の受講者の中から希望者を募り実施した。

○実 績

中村区ディサービスセンターの利用者（高齢者）が月1回（平成28年4月29日（金）14時40分～16時10分～平成29年2月15日（水）14時40分～16時10分）90分程度、来学、職員も2名同行。

ボランティア活動の事前準備・フォローアップの実施

活動①～⑪の当日お昼休み（12時30分～12時55分）に、事前打ち合わせと高齢者に渡すメッセージカードの作成を行った。また各回の終了直後に、学生のフォローアップを実施し、うまくいった点、課題点について発表し合った。

○成 果

この取り組みは、1年生から4年生までの参加がある。1年生、2年生は経験が浅く、高齢者とどのように話したらよいのか戸惑う場面が見られてが、一年を経過すると戸惑う姿は見られなくなり、沈黙にも冷静できるようになった。

3年生、4年生は経験を積んできた学生もいて、話の内容に幅が見られるようになり、教員側から見ても安心していられるようになった。1年生、2年生は福祉基礎実践力が、3年生、4年生は福祉実践力が高まっ

ていると感じられた。

12. 「傾聴活動論」

○目 的

傾聴に学ぶ。傾聴士とは何かについて理解し、その役割も知る。同朋大学認定「傾聴士」（一種）（二種）の資格取得に向けて、その理論と実践のあり方について理解する。

○内 容

ボランティア論、カウンセリング論、人間関係論、コミュニケーション論などさまざまな理論を援用して傾聴の態度を身に付ける。また、実際に傾聴活動をしている実践者の特別講義を聴く。さらには1回3時間の予定で高齢者施設に傾聴ボランティアに行く。

○実 績

1) 受講学生 15名

2) 実施日時

平成28年4月6日(水)から平成28年7月20日(水)までの毎週水曜日1限(9時～10時30分)15回実施した。

また、平成28年6月29日(水)1限は、いなべ市社会福祉協議会の話し相手ボランティア(傾聴ボランティア)養成講座を修了し傾聴活動をしている2名の社会人特別講師と担当職員1名を招いて講義を拝聴した。

○成 果

この講義で学生は傾聴とはどのようなことなのか理解できた。傾聴は対人援助の入り口であり、まず対象者の話を聴くところから始まりことを学んだ。傾聴士資格制度の始まりは、傾聴ボランティアにあり、傾聴ボランティアについても理解することができた。傾聴はカウンセリングの基本であり、学生たちはカウンセリングの基本についても学ぶことができた。また、ボランティアとは何かも学び、自発性、無償性などボランティアの

基本的事項についても学ぶことができた。最終的に、学生たちは傾聴士とは何か、また傾聴士の社会的役割を理解することができ、福祉実践基礎力が高まった。

なお、福祉実践基礎力は、経済産業省の社会人基礎力をベースにしている、その中で、「傾聴力」があげられている。傾聴活動論の取り組みは非常に関係が深いといえる。

13. 「インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」

○目的

将来のキャリアに関連した就業体験をする。

協力機関での職務を積極的に行い、実社会で必要な知識・スキル・態度・倫理観を体得する。各自の学習や進路適性を述べることができる。

○内容

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等における就業体験を通じて、講義等で得た知識を確認するとともに実社会におけるルールを肌で感じ、社会で生きる上で必要な態度やスキルを身につける。さらに、今後の学習方針を自ら確かめ、進路適性を確認する。

インターンシップ科目は、協力機関での30時間～40時間の従事時間のほか、事前・事後指導を含めた学習をする。

- ①ガイダンス、②学生の関心、適正などから協力機関を決定する、
- ③申込書の提出、④インターンシップ計画書の作成、⑤事前指導、
- ⑥挨拶、下見、⑦協力機関での就業体験、⑧教員等の巡回指導、
- ⑨事後学習

○実績

インターンシップは、目的に応じていくつかの類型に分けることができるといわれている。大別すると、(1)職場体験型、(2)課題解決型、(3)実務実践型、(4)採用直結型という分け方がある。

社会福祉学部では社会福祉現場実習、教育実習やボランティア活動などがインターンシップに該当すると言える。社会福祉現場実習、教育実習は「(3)実務実践型」に該当し、ボランティア活動は「(2)課題可決型」に該当すると考えられる。本学では、インターンシップをこのような基本的な考え方に基づいて参加率の現状を把握すると、約30%である。

しかし、文部科学省がインターンシップの基本的な考え方は、実習を除くということである。この考え方で参加人数を把握すると11名ということになる。学生は実習で手一杯で、実習以外のインターンシップまで参加する余裕がないと考えられる。

○成 果

実習以外のインターンシップに参加した学生から成果としてくみ取ることができる内容は以下のようである。

- ・協力機関の仕事の内容を理解できた。
- ・現場で働く職員から仕事してきて良かった点、苦勞した点を聴くことができ、大変今後の参考になった。
- ・プロフェッショナルの真剣さやこだわりに触れることができ、自分自身が中途半端な気持ちでいることを反省した。
- ・記録を書くのに苦勞した。
- ・もう少し事前学習をしてからインターンシップに行くべきだった。

14. 「その他（実務家を招聘する科目）」

○目 的

主に3・4年生のゼミ（社会福祉専攻：社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、子ども学専攻：総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）において、ゼミ担当者がゼミの学習内容を深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘する。そしてスムーズな就業につなげるための一助とする。

○内 容

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等の第一線で働いている実務家に就業動機、職務内容などの講義を拝聴するとともに、学生が実務家とコミュニケーションを図ることにより、ゼミの学習内容を深める。

○実 績

平成28年4月6日から平成29年1月16日にまでの講義期間の主に水曜日の2限、木曜日の2限で、専任教員18名のうち、5名がゼミの時間内に1回、各界の実務家を招聘しゼミを実施した。

○成 果

ゼミにおいて、実務家を招聘したのは5名の専任教員であった。その5名から報告された主だった成果は次のようであった。

- ・OBが講師だったので、身近に感じることができた。
- ・OBが講師だったので、自分も努力すればあのようにになれるのだと前向きになれた。
- ・福祉職の悩み、戸惑い、葛藤を理解することができた。
- ・講師の先生の熱意や人間性を感じることができて、自分自身も講師の先生のような人材になりたいと感じた。
- ・もっと自分自身を変えていきたいと思った。
- ・現段階で、自分は何がしたいのかよくわからないが、少しヒントを得たように思う。
- ・福祉現場の課題について理解することができた。

Ⅲ. 福祉実践基礎力とアクティブラーニングについて

同朋大学社会福祉学部の福祉実践基礎力とアクティブラーニング

○目 的

同朋大学社会福祉学部では、豊かな教養を培って人間と社会に関する心

理を探究し、社会福祉及び関連分野に関する専門的知識と技能を習得して、共に生きがいのある社会の実現に寄与するための教育・研究を行っています。そこで、通商産業省が提唱した社会人基礎力をもとに、平成24年度より社会福祉学部の学生に必要な福祉実践基礎力を考案し、毎年測定して教育に反映させるよう努めています。また、教育効果を高めるために、教科内容に合わせてアクティブラーニングの手法も取り入れるよう努めている。

○内 容

本学部の目指す人材を育成するために、初期段階としては基礎学力や専門知識などの育成を図っていて、さらに下記のような福祉実践基礎力を目標にして教員や学生を測定しながら育成を進めている。

この福祉実践基礎力を測定するために、学生用には「同朋大学福祉実践基礎力診断票」を作成し、年度末に1～4年生の学生に「学びあい×キャリアポートフォリオ（webポータルサイト）」よりweb経由で入力して集計しています。また、教員には福祉実践基礎力とアクティブラーニング実施状況のアンケート用紙を配布して記入してもらい、集計している。

福祉実践基礎力の概要

	社会的	領域	同朋大学社会福祉学部の「福祉実践基礎力」 3つの能力/13の能力要素	社会人基礎力 (参考：通商産業省)
			(技術的能力(基礎学力、専門知識))	
3つの能力	個人的	情意	心が動く力(主体性、協働性、目的性)	前に踏み出す力(主体性、働きかけ力、実行力)
		認知	じっくり考える力(課題分析力、計画力、気づき力)	考え抜く力(課題発見力、計画力、創造力)
	社会的	情意認知	共に生きる力(発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレス把握力、ストレス解消力)	チームで働く力(発信力、傾聴力、柔軟性、情報把握力、規律性、ストレスコントロール力)

○実 績

まず学生は、1年次生が139名、2年次生が95名、3年次生が66名、そして4年次生が45名から回答があった。ただし、各年の定員は190名であり、4年次生の回答は半数にも満たなかったが、他の学年は半数以上の学生から回答があった。これらを同朋大学福祉実践基礎力の3つの能力にまとめて、平成26年からの経緯をまとめた者が下表である。

回答は、「よく当てはまる」を1とし、順次「ほとんど当てはまらない」の5までの5段階の選択肢になっています。全体的に、各学年とも3つの能力の平均点が上がってきているので、学生の福祉実践基礎力が下落傾向にあることが分かる。

福祉実践基礎力の学年別平均点（平成26・27・28年）

	心が動く力			じっくり考える力			共に生きる力		
	26年度	27年度	28年度	26年度	27年度	28年度	26年度	27年度	28年度
1年次	1.82	2.10	2.53	2.10	2.36	2.76	2.11	2.38	2.70
2年次	1.99	1.98	2.63	2.05	2.42	2.75	2.07	2.33	2.78
3年次	1.76	1.77	2.79	2.07	1.96	2.95	2.07	1.94	2.92
4年次	1.76	2.12	2.41	2.08	2.43	2.73	2.07	2.31	2.57

次に、専任教員について、教員の育成したい資質とアクティブラーニング実施状況についてのアンケート結果になる。まず、専任教員の育成したい資質を丹俊集計したものが下表になる。教員の育成したい資質は、「じっくり考える力」が一番優先しており、次に「心が動く力」と「共に生きる力」が同じ平均で続いている。

そして、この「じっくり考える力」の構成要素である「5計画力」「4課題分析力」「6気づき力」はいずれも優先されている。さらに、「1主体性」「3自主性」「10状況把握力」なども優先的な構成要素であると考えられている。

目 黒 達 哉

平成 28 年度 教員の育成したい資質（専任教員：単純集計）

問 1			問 2													
「教員の育成したい資質」に関係が深い能力について、1位～3位の順位をつけてください。			「教員の育成したい資質」について、5つの選択肢から回答してください。													
			選択肢 1 よく当てはまる			選択肢 2 どちらかという当てはまる			選択肢 3 どちらでもない			選択肢 4 ほとんど当てはまらない			選択肢 5 まったく当てはまらない	
1	2	3	心が動く力			じっくり考える力			共に生きる力							
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
心が動く力	じっくり考える力	共に生きる力	主体性	協働性	自主性	課題分析力	計画力	気づき力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレス把握力	ストレス解消力	
1	3	9	4	12	10	10	12	14	12	8	10	10	15	6	5	6
2	7	4	5	4	6	5	4	2	4	8	6	6	1	8	11	8
3	6	3	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	16	16	16	16	16	15	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
平均	2.2	1.6	2.2	1.3	1.4	1.3	1.3	1.1	1.3	1.5	1.4	1.4	1.1	1.8	1.7	1.8

さらに、教員の悪支部ラーニングの実施状況をまとめたものが、次の表になります。全教員とも授業でなんらかのアクティブラーニングを実施しています。「8 プレゼンテーション」や「9 振り返り」など、じっくり考える力を育てることを重視しているようです。また、「1 学生参加型授業」「3 PBL（課題解決型授業）」や「5 グループワーク」など、学生を授業の中で主体的な学習をするよう努めている。

以上のように、社会福祉学、心理学や子ども学などのある本学の社会福祉学部では、人を相手としたより実践的な学問分野を擁しているので、学

中部圏教育改革ネットワーク

生が能動的に学ぶように配慮した授業展開に努めているようである。また、このような授業展開を通じて、学生たちのじっくり考える力を養うことを目指していると考えられる。

平成 28 年度 教員のアクティブラーニング実施状況（専任教員：単純集計）

アクティブラーニング項目を授業で実施したかどうか○を入れ、実施した場合に学生が能動的に学ぶようになったかどうかの評価を5つの選択肢から回答してください。 選択肢1 よく当てはまる 選択肢2 どちらかという当てはまる 選択肢3 どちらでもない 選択肢4 ほとんど当てはまらない 選択肢5 まったく当てはまらない		1	2	3	4	5	6	7	8	9
		学生参加型授業	共同学習を取り入れた授業	PBL (課題解決型学習)	PBL (プロジェクト型授業)	グループワーク	ディベート・討議	フィールドワーク	プレゼンテーション	振り返り
1		14	11	13	11	14	7	7	14	14
2		1	3	1	3	1	7	7	0	0
3		0	0	0	0	0	0	0	0	0
4		0	0	0	0	0	0	0	0	0
5		0	0	0	0	0	0	0	0	0
計		15	14	14	14	15	14	14	14	14
平均		1.1	1.2	1.1	1.2	1.1	1.5	1.5	1.0	1.0

○成 果

学生たちの福祉実践基礎力は下落傾向にあります。これは昨今の学生たちの福祉離れが影響していると考えられる。これらの反映か、教員の育成したい資質が「じっくり考える力」を優先するようになってきた。そし

て、その構成要素である「計画力」「課題分析力」「気づき力」やこれらと関連する構成要素を育成しようとするようになった。さらに、授業では、「プレゼンテーション」を実施して学生たちの力を確認し、「振り返り」によって着実に学生たちの能力を向上させていくことをしているようである。また、本学部は、社会福祉学や心理学、子ども学のように人とかかわる力を育てるため、「グループワーク」「学生参加型授業」などにも力を入れて、学生たちを育成しているようである。

おわりに

同朋大学社会福祉学部では、平成 22 年度文部科学省大学改革推進等補助金「大学生の就業力育成支援事業」に応募し、「持続可能な福祉実践力を高める取り組み」というテーマで採択された。引き続き平成 24 年度から平成 26 年度においては「産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事業」に採択され、中部地区 23 大学の参加校として、東海 B チームに所属し、「アクティブラーニングの活用」、「地域連携事業」を推進し、福祉実践基礎力、福祉実践力の向上を目指して事業を推進してきた。その後、中部圏教育改革ネットワークの一員として参加校との連携を継続している。

平成 27 年度からは大学において自己資金を投入し、2 年間事業を継続しております。大学関係者のご理解とご協力に感謝の意を表したい。今回、報告したように、アクティブラーニングを活用した教育内容、地域・産業界との連携力の強化を図る中で、学生の福祉実践基礎力は目標に近づいたと考えられる。今後ますます学生の福祉実践基礎力が高まるように、来年度も教育プログラムの質を高めたいと考えている。

謝辞

この実践報告をまとめるにあたり、産業界ニーズ委員会の委員の先生方をはじめ、社会福祉学部の教職員、学務部の教職員の皆様の協力を得た。ここに感謝の意を表します。

注記

- 1) アクティブラーニングとは、授業者が一方向的に知識伝達をする従来型の講義形式ではなく、学生参加型授業、共同学習を取り入れた授業、課題解決型学習やPBL (Problem-Based Learning / Project-Based Learning) など、学生の能動的な学習をとりこんだ授業を総称するもの。

引用文献

- 1) 平成 24 年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」申請書
- 2) 同朋大学社会福祉学部 平成 28 年度大学教育改革推進事業『中部圏の教育改革ネットワーク』～平成 28 年度 同朋大学社会福祉学部の実践報告～, 2016.
- 3) 同朋大学社会福祉学会 S 学会ジャーナル Vol. 18, 2017.

参考文献

- 1) 和木康光『同朋和敬—同朋大学のあゆみ—』中部経済新聞社, 2002.
- 2) 中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて (答申)』2008.
- 3) 角方正幸・松村直樹・平田史昭 (共著)『就業力育成論 実践から学ぶキャリア開発支援策』学事出版, 2010.

(本学社会福祉学部長、教授：カウンセリング論、ボランティア活動)